

溶血性尿毒症症候群

溶血性尿毒症症候群とは？

志賀毒素（ベロ毒素）を産生する O-157、O-26、O-111 などの腸管出血性大腸菌に感染することによって貧血、血小板の減少、急激な腎機能の悪化などが引き起こされる病気です。

症状

溶血性尿毒症症候群（HUS）の症状は腸管出血性大腸菌（EHEC）感染者の約 1～10%に発症し、下痢の出現後 4～10 日に発症します。下痢の 2～3 日後に発症する例もありますが、そのような例では急激かつ重症の経過をとることがあり注意すべきです。20～60%の患者が透析療法を必要とする急性腎傷害を合併し、1/4～1/3 の患者が何らかの中樞神経症状を呈します。急性期の死亡率は約 2～5%といわれています。

治療

残念ながら根本的に治療できる手立てはありません。下記の治療法がありますが症状やデータによって決定します。

- ・ 輸液、輸血
- ・ 降圧療法
- ・ 透析療法
- ・ 血漿交換
- ・ 脳症の治療

当院での対応：

溶血性尿毒症症候群の診断・治療ガイドライン（2013）に基づいて診断・検査・治療をすすめます。ガイドラインは現在改訂中作業中で当院の医師も改定に関わっているため、最新の治療を受けることができます。また透析や脳症に対する高度特殊治療は神戸大学やこども病院と連携して行います。